――序にかえて――

吉田嗣義君へ

永杉喜輔
（群馬大学名誉教授）

『終わりよければ』が本になって、嬉しい。しかし、それに序文を――というが、それはおこがましすぎる感じがする。

光陰矢のごとし、君とのつき合いは半世紀近くになる。君だけではない。君の兄貴・嗣延君とは昭和十年以来だから半世紀を超える。人生は出会いというが、感無量だ。

君は京大哲学科で、たしか僕の九年あと、木村素衛先生（故人）が共通の恩師。君の卒業直前、僕が木村先生を訪ねたら留守で、奥さんが、吉田さんは大変な勉強家と言った。そのころ僕は滋賀師範の付属小学校長だったので、君に

滋賀県立虎姫中学に来てもらった。その後まもなく校長室に現われて、「僕、結婚しました」と、きょとんとした顔で言った。君はいらんことは言わん。みじんもウソがつけない。誤解する人も多く、君はソンばかりしている。

戦争中だった。やがて君は配属将校や校長とケンカして岩手の女子師範に転じ、生徒たちとは今も深いつきあいが続いているほどだが、学内派閥の喧闘に愛想をつかし、戦後すぐ、千葉の青年師範（今の大学）に来た。

そのころ僕は滋賀を追われて上京、焼野が原のバラックで下村湖人と月刊誌『新風土』を出していた。その編集同人に君の兄貴もいて、しばしばバラックに集まり、編集そっちのけで談論風発、そこへ君はよく教え子をつれてやって来た。その後、湖人先生のおすすめで大分の社会教育課に行ったが、相変わらずあばれ、福祉に転じて芽を出した。福祉部長代理までいったが、こんどは県会議員とケンカして部長になれず、定年退職、「任運荘」をはじめた。そして、大宮の僕の家にやって来て、呆けたら来てくれと言った。

先日、ＮＨＫ（教育）シルバーシート番組に君が出たのを病妻が見て、「吉

田さんはエラくならはった」と僕を顧みて、お父さんは？　ときた。それでいよいよ序文が書けなくなった次第だ。

君の兄貴は沖縄復帰に命をかけ、惜しくも昨年逝った。その追悼文を僕は泣きながら書いた。それに「死してしかばね拾う者」があるではないか、と書き、兄貴の魂のあとつぎをしてくれと君に頼んだ。――嗣延君は『小さな闘いの日々――沖縄復帰のうらばなし』（文教商事出版、昭和五十一年刊）という著書を残した。嗣延君は下村湖人の『次郎物語』第六部のモデルに予定されていたが、湖人病没、書けずに惜しかった。

『終わりよければ』すべてよし。僕も老人中の老人で、今は五年来の病妻の守りをしているが、呆けかかった二人のケンカも楽しい。ただ教師という弱い者いじめでメシを食ってきた僕だ、病妻の守りもうまくいかん。

君が書いたのか、話を聞いたのか、うろ覚えだが、たしか、老人ホームで働いていた老婦人が病気になったままのひとり暮しを君が見舞ったら、食卓にはメシの食い残しと黄ばんだ布巾があり、老女は君を見て、「もう二度と人間に

生まれたくない」と言ったという。かつてはその婦人も老人の看護を生き甲斐としたのだ。その身になってみないと人の気持ちはわからない。

僕の末女が十九で即死した時、僕はしみじみそれを感じた。医者は「子供さんは何人ですか」と聞いた。「あと兄と姉と二人です」と答えると、それならいいという顔を医者はした。三マイナス一だ。二人だろうが十人だろうが、その子は僕の子だ。その関係は絶対だ。医者は好意でそう言ったに違いない。絶対第三者にはわからない。妻は気が狂いそうになった。君が見舞った老女の言葉で、僕はこれを思い出した。それをエゴイストといえば人間みなエゴイストだ。ただ自分をエゴイストと思う人は救われるのではないか。「善人なおもて往生す」。

ホームには乱暴な老人もいる。寮母さんをなぐる。すると君は、僕をなぐってくれと言う。

ＮＨＫテレビで君は「おむつ」の話をした。僕は何回も行ったが、「任運荘」には何のにおいもない。今の日本の政界、官界、教育界は臭気ぷんぷん。それ

に対する痛烈な非難と受け取った者が何人あるだろうか。君にしてはずいぶん控え目に言っていたので、ひとごととして聞いた人が多いだろうと思った。

そうそう、もう一つ。終戦直後、日本を福祉国家にしたいと、自分で精神薄弱児と戦災孤児を集めて、滋賀県に「近江学園」を創設した糸賀一雄（故人）がいる。その実践と思想を書いた『福祉の思想』（日本放送出版協会刊）がある。これと『終わりよければ』を併せ読むと福祉のすべてがわかる。糸賀は滋賀県庁で僕の後任として来た京大哲学科出だ。京大は東大と違って野党だからこういう人物が出る。ノーベル賞もすべて京大だ。糸賀も君もいわばノーベル賞ものだ。しかし、いまどきの賞はショウ（見せもの）だ。そんなものをもらうと福祉が泣く。老人福祉まで票取りに使おうとする徒党さえあるくらいだから。

もうこれでよそう。君、ケンカはもうよい。一度倒れた君の心臓にひびく。自分の体を大切にしたまえ。

乱筆多謝。

平成二年一月元朝

任運荘で

任運荘で随時開かれる「任運大学」

1 取り戻せ！「尊厳ある老い」

ある町、ある校長のお宅。そこの老母は自分の家のふろに入らず、銭湯行きです。わけは嫁や孫たちがおばあちゃんの入るのを嫌うからです。

若くして未亡人になった老母は、お寺に住み込み一人息子をやっと学校にあげ、校長にまでなったのに、とそのお寺に来ては深く嘆くのです。台所に立つことなど許されません。この分では洗濯なども別々でしょう。これは今の日本のお年寄りの揺らぎだした座を暗示しています。

「老い」とはどんなに美言を弄しようと、持っているものがどんどん失われていく時代です。若さも健康も経済力も社会的地位も著しく後退。年相応にすべてにつましくしていても、それさえ満足させるのに苦労します。高名な良寛和尚には「老い」を詠んだ歌がたくさんあります。「老いをいたみて」と題する長歌の結びで「かにかくに すべなきものは 老いにぞありける」と言っていま

す。なす術（すべ）がなくなっていく。この老いの真相を受容せよ、と励ましています。

ただ、三十年ほど前と今とでは明らかな違いがあります。それは老人だけがのけ者になって銭湯へ行くという風景は、普通ではなかったということです。その頃まではもはや現役でなくなった老人の座はそのまま敬愛の座でした。失った空白は皆の敬愛で補われていた。しかし、今はそうでなくなった。だから「老い」の現代的特徴はとくに「愛が失われた」という点であります。

しかも、日本においてはそれがとくに著しい。総理府青少年人格形成日米比較の調査結果を見ましょう。「老人・身障者をいたわることが身についている」度合いの調査では、個人主義の国、アメリカの青少年は八四・三％、日本はわずか三八・四％。次に「親たちは老人・身障者をいたわるよう教えているか」では、何と日本の親たちは一八・三％、アメリカは三倍以上の六五・三％、考えさせられる数字の開きです。銭湯へ行く老母の境涯、その背景が理解できます。

心の背筋、しゃんと伸ばし。

孤独は耐えられますが、家族の中の孤立はとても忍び難い。だから、日本の老人自殺率は先進国中トップクラス。ハンガリー一位、日本二位。その日本はイギリスの三倍、フランス、スウェーデンなどの二倍の高率です。――「厚生省人口動態統計」から。

そうした状況下ですから、嫁に愛される老人になれとか、若者たちに嫌われない学習をしようなどの要求や座談会があります。そして、日本の現代社会体制は、尊厳ある老人でなく「愛される老人」

「かわいい老人」像のみを要求しているところに根本問題があるということを、ここで強く指摘しておきます。

わが生涯の終わりにさしかかって、そんな生き方は真っ平です。そんな卑屈な老人像は傍（はた）からみてもわびしい。心の背筋をしゃんと伸ばしている高年像こそ、ひとも敬愛する。

ひと皆が老いる。晩年に不安と屈従しか待っていない国家なら、完全に存在理由を失っています。終わりこそよくなければ、ひとは生きられません。

では、終わりをよくする者はだれか。それはまず、老人自身です。自分を含めて万人のために、終わりよき社会体制を目指す。この使命感の下に老人層は立ち上がるべきです。現在の高齢化社会問題は長命と老人の増大を恐怖とするところに視点を置いている。それこそが問題です。老いがよければすべてよし——この観点こそ人類真実の要求でなければなりません。

日本の全有権者一五・五％以上が老人です。この強大な勢力の上に日本の老年者たちはいつまで眠り続けるのか。定年六十歳を目指しつつ年金支給開始を

六十五歳にしようという非人間的な政策がいま準備されています。五年間は自分の力で勝手に生きていけという思想こそ根源的な悪です。

アメリカの老人勢力の政治行動は、定年制そのものを撤廃させています。